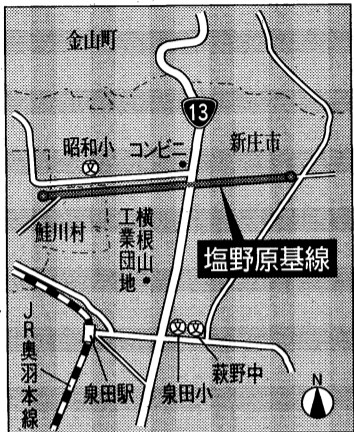


塩野原基線 “測量遺産” に

近代日本の地形図作成の基準となった、新庄と鮭川両市村にまたがる「塩野原（しおのはら）基線」について、国土地理院が戦前の「測量遺産」として標示板を設置するなどの保存事業に取り組み、同基線上に地元住民が「測量道（みち）」と呼ぶ東西約5キロの直線道路が残り、当時の基線尺（4尺の鉄の棒）を用いて測量することが可能な全国唯一の場所となっている。

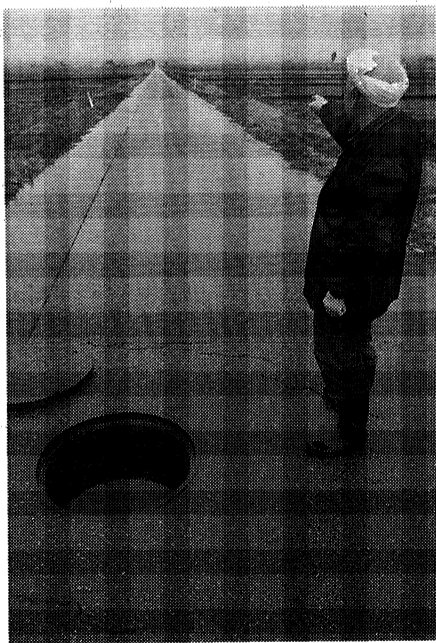
塩野原基線は1894（明治27）年、陸軍参謀本 一等三角点で、新庄市萩野（金山町）や金沢山（新庄部陸地測量部（現国土地理 仁田山を東端、鮭川村昭和 市）と三角形を形成し、葉院）が設置。基線の両端点を西端とする5・129（山や火打岳などに三角形網



基線 一辺と二角で三角形を確定する三角測量の基準となる一辺に相当し、基線尺を使い正確な距離を測量した。旧陸軍が日本の5万分の1の地形図を作成するため、1882（明治15）年の相模野（神奈川県）から1913（大正2）年の択捉（北方領土）まで全国に計15基線を設置。東北地方では塩野原と鶴尾平（青森県）の計2基線。

を広げること、正確な地形図の作成に役立てた。塩野原は同市北部の塩野地区周辺一帯を指し、1897（明治30）年に陸軍の軍馬補充部萩野支部が設置され、1923（大正12）年の廃止後、住民に払い下げられた。同基線に当たる直線道路は現在、国道13号をまたいで田園地帯を貫く農道として利用されている。GPS（衛星利用測位システム）測量など技術の進歩で、基線は事実上役割を終えており、他の基線上には駅が建つなど昔ながらの測量はできなくなっている。

国土地理院 15日に標示板除幕式



マンホールの中にある塩野原基線東端の一等三角点。東西に直線の農道が残る。新庄市萩野仁田山

塩野原基線でも東端点が埋められてしまう危機があった。隣接地に畑を所有していた地元の伊藤佐吉さん（83）によると、約40年前の圃場整備の際、農道に盛り土を行ったが、一等三角点の測量史上の価値を知る人たちの尽力で、農道中央にマンホールを設けて残すことになったという。国土地理院は測量遺産の保存事業として今年15日、基線の両端点に設置する標示板の除幕式を行う他、住民らを対象に萩野地区公民館で説明会を開く。東北地方測量部（仙台市）の池田尚広測量課長は「地元の皆さんに塩野原基線の重要性をぜひ知ってもらいたい」と話している。